

おわりに

たまたま入手した1冊の『結核予防接種に関する報告書』（財団法人結核予防会発行）が人体実験集と分かり、その証明には4半世紀かかりましたが、ついに全貌を明らかにすることができたと思うので、記録として残すために出版することにしました。

「結核予防に関する実験」は背蔭河（東郷部隊）、731部隊、満州国衛生技術廠で行われました。特に満州国衛生技術廠では、1934（昭和9）年10月～1944（昭和19）年4月まで子どもたちを実験動物として結核の研究が行われます。今回の著書は、我が国の結核研究の人体実験を、これまで隠されてきた戦前・戦後の手に入る限りの資料を検証して明らかにしたものです。

『結核予防接種に関する報告書』はもちろん人体実験集でしたが、本書『BCGと人体実験』を執筆中、それ以外の日本近代医学史に残るほとんどの実験「ウイルス病、鼠径リンパ肉芽腫病（第4性病）、日本脳炎、馬の脳炎、肺切除法」も人体実験で行われていたと疑われました。

伝染病研究所では、宮川米次が所長になる前から特選研究（人体実験）が行われていたことが、『実験医学雑誌』の雑報から証明することができたと考えます。さらに重要なことはこれらの人体実験が主に、伝染病研究所が文部省に移管された後の1915年（大正4年）頃から行われていたと推察できることです。

東京大学付置伝染病研究所は、現在、東京大学医科学研究所となっています。しかし、東京大学医科学研究所のホームページには、「医科学研究所は1882年に創立された伝染病研究所を前身にし、付属の研究病院を持つ我が国唯一の医学・生命科学の研究所です。感染症、がんなどの疾病を対象とし、基礎研究の成果を医療に直結させることを使命としています」と書かれています。

医科学研究所が伝染病研究所の伝統を引き継いでいることは分かりますが、文部省付置伝染病研究所時代の詳細が分かる沿革史には、1915（大正4）年から1944（昭和19）年の沿革と資料が欠落しています。この時期は人体実験が盛んに行われた時期であり、その間の沿革が意図的に抜けていると推察できます。

伝染病研究所のことを最も理解できる『実験医学雑誌』の雑報が、1935（昭和10）年～1944（昭和19）年まで、医科学研究所と長崎大学医学部以外の図書館から消えていました。1935（昭和10）年以降の雑報は、731部隊の真相や太平洋戦争に至る伝染病研究所の歴史が分かる重要なものでしたが、医科学研究所の図書館は、コピーのサービスを行わないと、今でも断っています。

これでは過去の伝染病研究所の歴史隠蔽と同じです。医科学研究所の必要性の有無を国民に広く問うべきです。

実験動物であった人に対応（カモフラージュ）する動物は、結核ではモルモットに、日本脳炎では猿に、第4性病でも猿、肺切除では家兎になっています。

『結核予防接種に関する報告書』では、4953人の人体実験結果が掲載されています。これは人類史上最大の人体実験集で、今も財団法人結核予防会、東北大学図書館に保管されてい

ます。『結核予防接種に関する報告書』1943（昭和18）年に発行されていますが、未だに問題にされていません。このまま問題にされないのでしょうか。

結核の人体実験のために、日本学術振興会、結核予防会に莫大な国家予算がつけ込まれていました。『結核予防接種に関する報告書』が人体実験集であることを結核予防会は公表すべきです。1981（昭和56）年11月30日、光文社から出版された『悪魔の飽食』は731部隊の残虐な行為を世に問い、このドキュメントは瞬く間にベストセラーになりました。

森村誠一のこの本が出版されて、731部隊研究者の書籍が多数出版されますが、731部隊の研究開始の時期さえ明確に証明し得ていません。今回初めて731部隊の研究開始時期が、消えた『実験医学雑誌』の雑報から1938（昭和13）年4月であることを証明できました。731部隊の前身部隊（背蔭河の東郷部隊）の開始時期も、実験内容も理解されていません。また、満州国衛生技術廠（1934年秋から1944年4月）の存在と実験内容には誰も何も気づいていないのです。

1931（昭和6）年の『陸軍軍医学校50年史』では、「防疫学教室及び研究班にあっては、軍隊に於ける結核予防、結核予防接種の免疫効果及諸種免疫効果の比較研究に努めると共に、作業の合理化に依る能率増進、経費節減に関し調査研究しつつあり。而して結核予防に就いてはなかならず免疫性付与並びに結核患者の早期発見に関し、諸種免疫効果法の効果批判に就いてなかならず経口免疫法に関して調査研究しつつある。共に着々研究の進むると共に培地及培養方法の改良に依り生産能率の増進及価格低減に関し、漸次所望の域に達せんとしつつあり」と書かれています。この年から結核の研究が猛スピードで731部隊の前身、背蔭河の東郷部隊で進行していると推定できます。

今回、柳澤謙の著書『我が一生の思い出』から満州国衛生技術廠では子どもの結核の人体実験が行われたことが分かりました。

731部隊研究家の最大の問題点は、731部隊下級隊員からの証言を主にしていることで、証拠となる文献を収集することはほとんどできていません。これでは731部隊をはじめとした人体実験のおぞましい歴史が、今までも今後も明らかにされずに闇に消えることとなります。日本近代医学史上に残る人体実験の事実を明らかにすることが重要です。

それは戦後の宮川米次の思惑が今も生き続けているからであると考えています。

戦後アメリカに731部隊の人体実験の存在が明らかになった時、宮川米次は東大付置伝染病研究所（現医科学研究所）の人体実験を隠し通すため、細菌戦部隊（731部隊）を全面的に前に押し出した作り話を、石井四郎に話すように工作したと思われます。

731部隊で細菌による生体実験が行われていたことは事実ですが、国民に知られて最も困る結核、第4性病、日本脳炎などの日本近代医学史上で誇るべく実験は、恐らく石井四郎の役割ではないと思われます。

本書で指摘したように、日本近代医学史の汚点として残るような研究に援助してきた疑念の多い日本学術振興会、結核予防会は今こそ事実関係を検証し、国民（特に医学関係者）に公表すべきではないでしょうか。

B C G接種が結核予防に効果があるというのは虚偽の話です。1951年（昭和26年）11月9日読売新聞で、柳澤謙は「B C Gは有効無害・強制接種へ」と述べていますが、この記事の横にマイヤース教授（アメリカ・ミシシッピ大学）の手紙が取り上げられ、そこには「私は今まで日本の結核予防対策の中で、主としてB C G接種の方法を研究してきたが、B C G

が結核患者の死亡率を大幅に減少させる上に重大な役割を果たしてきたとは思えないのである。……教授の予防方法はツベルクリン反応検査で感染を知り、レントゲン写真で発病の如何を確かめ、発病の場合は療養所に入れて治療を行うと言うことに尽きる」と書いてありました。

『結核予防接種に関する報告書』のBCGの効果判定は呼吸器感染ではなく、皮下接種によって強毒結核菌を人為的に感染させて行ったもので、医学的にも倫理的にも正しい臨床治験ではありません。

日本のBCGの治験は国際舞台ではほとんど通用しません。1968年にインド（マドラス）できちんとランダムに割りつけて36万人にBCGの治験を行ったところ、全く効果がないという結論が出ています。

柳澤謙が作ったツベルクリン反応液は、戦後まもなく力価が著しく減少しました。このツベルクリン反応液では、ツベルクリン反応陽性者でも陰性と判断され、毎年繰り返しBCGを定期的に接種されてきました。接種後は空豆大の大きな癩痕を残し、管針になってからも9個の接種痕2か所を残します。ツベルクリン液、BCG製品はビーシージー製造株式会社で独占販売を行ってきました。BCG販売は直ちに中止すべきです。

筆者は内科医ですが、この40数年肺結核に遭遇したことは、ほとんどありませんでした。今では核は稀な病気ですが、結核を診断する時、既に乳幼児期にBCG接種がなされているのでツベルクリン反応は意味がありません。代わりにT-スポットという血液検査を行いますが、これも今ひとつ診断に役立つというのではなく、PCR（核酸同定）検査を行います。同時に3日間連続の喀痰の塗抹検査、結核菌培養検査も行いますが、結果が出るまでには8週間かかります。

幼児期のBCG接種を中止すれば、結核の診断はツベルクリン検査が大きな役割を果たします。この著書が今後、我が国のBCG接種の中止に役立つことを願っています。

最後になりましたが、樋口竹広氏、清水さやか氏、肝臓クリニック札幌・品川祐基典氏、作業場を提供いただいたアネックスメディカル・姉崎正仁氏、出版するにあたりご協力いただいたあけび書房代表・久保則之氏に心から感謝いたします。

2019年6月27日

美馬 聰昭